

堀先生の情熱と人間らしさ

小川 景子[✉]

広島大学大学院 人間社会科学研究科

堀忠雄先生は、研究者であり教育者であり、等身大の人間でいらっしゃいました。私が大学3年生でお会いした時、堀先生は確か55歳でした。その時の堀先生は、ロマンス・グレーの髪の毛で小柄な紳士といった様子でした。大学生の私たちからすると、実年齢の10歳くらい上の風格にみえました。それ以降は永遠の55歳でした。椅子にちょこんと座っておられ、女性の学生さん達からは「かわいい」とよく言われておられました。もちろん、研究室に所属して研究を進めれば進めるほど、そのお姿はかわいいどころではなく、どんどん大きくなっていきました。

先生の授業は、どう頑張っても眠くなるので、「声の周波数に何か仕掛けがあるんじゃないか」、「わざと寝させようとしているのではないか」、「さすが睡眠研究者」、とみんなで言うていました。いくら授業を聞こうとがんばっても、気が付いたら入眠しています。そんな中、先生の授業で生涯の研究テーマに出会えたことは私にとって宝でした。まどろみながら、これだ！と思ったのを覚えています。一方で、最先端で専門的なお話も、先生の話術にかかれば、小学生から高齢者まで、皆さんが面白い！というご講義になりました。真面目な話の途中に入る不意の冗談に、皆さんがクスツとして、そんな皆さんをみて、先生がニヤリとされる、そんなやり取りもありながら、誰もが引き込まれる講義になっていったのだらうと思います。

先生のところには、様々な相談事が舞い込んでいました。大学や学会関係の案件だけでなく、研究室内外問わず学生さん達の相談、突然やってくる知らない方からのお手紙にも真摯に対応されていました。先生はとてもお忙しいはずなのに、相談のたびに手を止めてじっくり話を聞いてくださっていました。あるとき私自身も2、3時間くらい話を聞いてもらった（話してくださった）ことがありました。聞いてもらった後、先生の部屋を出てドアを閉めた瞬間、「あれ、何でお伺いしたんだっけ？」となっていました。何はともあれ、よし、またがんばろうといつも思えました。時々、

同じ学部のキノコ研究の先生が「堀さ〜ん」と言って研究室にいらっしゃって、「僕もさー」「いや、実は僕もさー」と、お二人で体の痛い所自慢しておられるのが楽しく、なんだかほっとしました。

先生は、動物や植物もお好きで、定年退職したら土いじりをして過ごしたい、とおっしゃっていました。ただ、周りにいた誰もが「(研究のことが頭を離れるわけないだろうから)絶対無理だろう」と確信していました。研究も、教育も、植物も手間をかけて応答をきくのがお好きだったのかもしれませんが。ご定年後に先生のお宅へお伺いした際、息子さんが「毎日パソコンに向かっている」とおっしゃっていました。

そんな先生が羽目を外してすごく楽しそうにされるのが飲み会でした。大学では教育者の側面が強い堀先生ですが、学会では第一線の研究者であり、研究を楽しみ、一喜一憂する少年のような方でした。私がお会いした頃の堀先生はHori stageもでき、お昼寝の研究も定着し、研究室には多くの人が集まり、研究者として育ってっていました。でも、その人生は山あり谷ありの連続でいらっしゃったのではないかと思います。先生は、とことん研究して、悩んで、飲む(お酒)、等身大の人間でいらっしゃったように思います。ご苦労と努力の分、一言一言に力があり、皆さんの心に響いたのではないかと思います。そして、常に5年後、10年後、さらにその先をみておれたと思います。最近、先生が書かれた文章を読む機会がありました。「この時点ですでにここまで考えておられたのか」とびっくりしました。預言者かと思いました。日頃は自分を律し、飲み会で楽しく発散して、またがんばる。そして、冷静にデータと数年先をみる、この繰り返しでいらっしゃったように思います。

堀先生は睡眠で世界は変わる、変えたいと考えておられたと思います。お葬式の時、とても悲しかったと同時に、その情熱に対して「まだ何も自分からご報告できることがない」と思いました。まだまだ教えて頂きたいことばかりでした。先生ならどうおっしゃるか

✉ ogawakeicom@hiroshima-u.ac.jp

など考えながら、過ごしていこうと思います。そして、先生のように論文や書物だけでなく人の心にも残る研究者になれたらいいなと思います。

1999年に堀先生が大会長をされた第24回日本睡眠学会（広島大学）に私も学生でお手伝いしました。

私の人生初学会でした。そして2025年に今度は林光緒先生が大会長で、同学会（第49回日本睡眠学会）を同じく広島大学で開催されます。堀先生がいらしゃったら、「ほっほっ」と1番に喜んでおられたらろうなと思います。



ほぼ昔のままの堀研実験室